

日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 207th American Astronomical Society Winter Meeting

渡航先—アメリカ合衆国

期間—2006年1月7-14日

アメリカ合衆国ワシントン DC にて行われた、第 207 回 American Astronomical Society Winter Meeting へ参加し、「Near-infrared Extinction Laws in the Rho Ophiuchi, Chamaeleon and Coalsack Dark Clouds」のタイトルで発表を行った。延べ 3,000 名以上が参加する、比較的規模の大きな会合であった。デフォルトのセッションはポスター発表であり、マリオットホテルの地下全体を利用した会場には、NASA をはじめとした団体や企業のブースも立ち並び、活発な交流がなされていた。

ポスター発表は、日本天文学会のように期間中を通して掲示が許されるのではなく、一日しか機会を与えられない。筆者の発表は最終日であり、また運悪く会場の一番角に割り充てられ、さらにそこが通路を隔て離れ小島になっているという、公平な機会が与えられたとはとても判断できない状態だった。また近隣のポスターを見回してみても同種の研究とはいいがたく、孤立した発表とならざるをえなかった。周辺から人の引けた隙を見計らって掲示板の角度を変えるなど、姑息な手段を使ってでもアピールできるよう工夫した。その甲斐あってか、わざわざ足を運んでくれる研究者もおり、ポスターの前で歩みを緩めた研究者には積極的に話し掛けるようにした。

現在の減光研究は 5-10 ミクロン帯が旬のようで、観測対象だけ異なりほかは全く同種の研究発表を三つ確認できた。 R_V との関連性を示した研究であり、Draine (2003) が初めに主張した議論だと理解している。情けないのはどの研究も観測結果の羅列であり、ダストによる減光研究であるにもかかわらず、ダストのプロパティーについては何も触れていない。Weingartner & Draine

(2001) のシミュレーションを引き合いに出し、「これは R_V では 3 程度に相当する」とか「5 のケースによく一致する」などというだけで議論を完結させ、物理的に高い鼻をさらに高くし、したり顔でポスターの前に立っている。私は「ダスト」と記載されたポスターを掲示しているすべての人物に「これでダストの物理の何がわかったのか？」と尋ねたが、「サイズ分布が異なるだろう」「ケミストリーが違うだろう」などという至極当然の答えしか得られなかった。私はここで発表した成果の一部を昨年暮れ ApJ へ投稿したが、一発でアクセプトされた理由を理解した。「私のポスターは最終日だから見にきて欲しい。upper size cutoff をパラメーターとしたシミュレーションを行い観測と比較しているので、ダストのプロパティーについても言及しているから」と伝えたが、そのうち実際に訪ねてきたのは一人だけだった。

研究会へ参加したことが今後の私の研究に直接大きな成果を与えるということは、もちろん、期待できない。しかしながら、一週間にわたって朝から晩までクタクタになるまでセッションへ参加し多くの人と議論を交わせたことは、将来の私の研究に甚大に作用する経験になったことは間違いないだろう。その象徴的な例として、現在は NASA エイムズ研究所に在籍の Ueta 博士と偶然再開したことが挙げられる。彼とは、2003 年にコロラドで行われたダストミーティングで知り合ってから以来である。彼の紹介により、セッション外においても多くの研究者と交流をもつことができた。最後になったが、非会員が AAS ミーティングへ参加するにはスポンサーが必要であったのだが、その役を引き受けてくださった国立天文台の田村元秀博士に心からの感謝の意を表明したい。

直井隆浩 (宇宙航空研究開発機構)